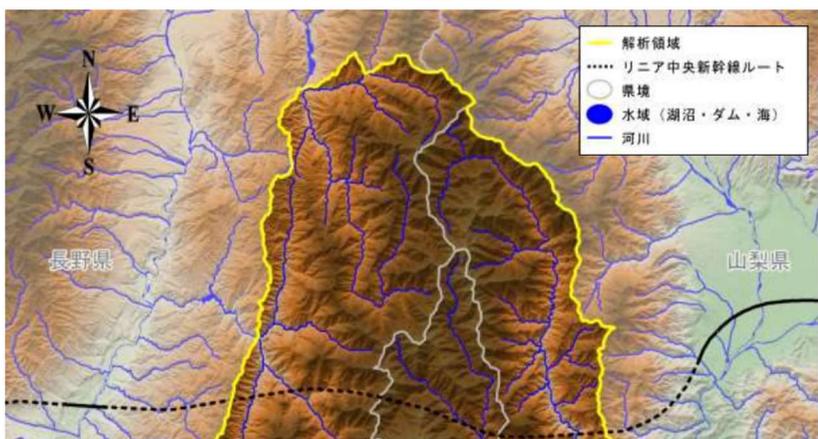
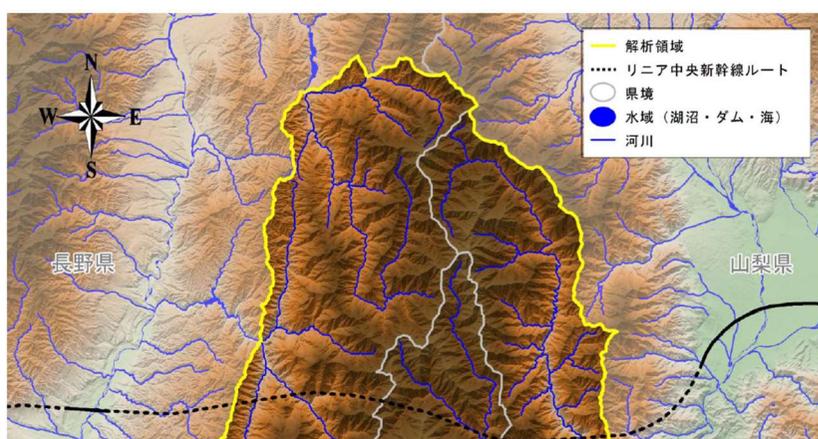
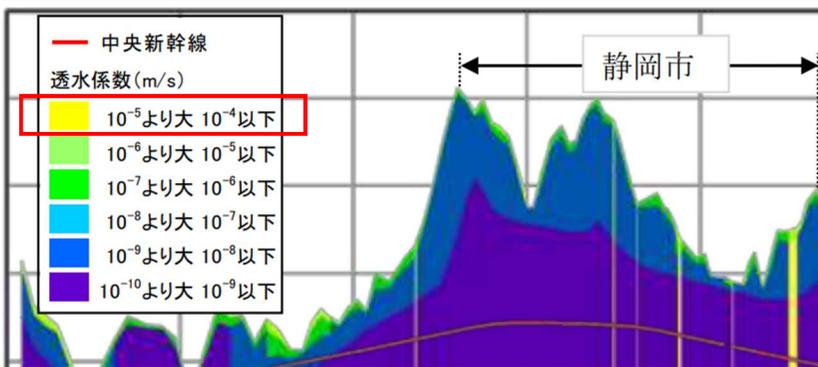
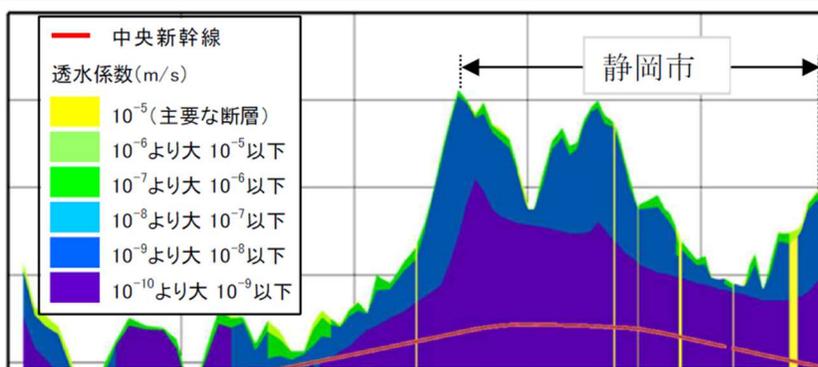


正誤表 (平成 28 年度 南アルプス環境調査 結果報告書 VI水資源調査)

修正前		修正後	
頁	誤	頁	正
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 本坑トンネルに併設される先進坑の参考となる青函トンネルの例・・・図4</li> <li>▶ 本坑の工事に伴う非常口（斜坑）と工事用道路の配置・・・図5</li> <li>▶ 非常口（斜坑）トンネルと工事用トンネルの断面形状・・・図6</li> <li>▶ トンネル湧水を大井川に戻すため計画されている導水路トンネルのルート・・・図7</li> </ul>	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 本坑トンネルに併設される先進坑の参考となる青函トンネルの例・・・図4</li> <li>▶ 本坑の工事に伴う非常口（斜坑）と工事用道路の配置・・・図5</li> <li>▶ 非常口（斜坑）トンネルと工事用トンネルの断面形状・・・図6</li> <li>▶ トンネル湧水を大井川に戻すため計画されている導水路トンネルのルート・・・図7</li> <li>▶ 大井川最上流部における水路式発電所の配置・・・図8</li> </ul>
	 <p>VI-3</p>		VI-3
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 大井川最上流部における水路式発電所の配置・・・図8</li> </ul>	4	
			
8		8	

17

17

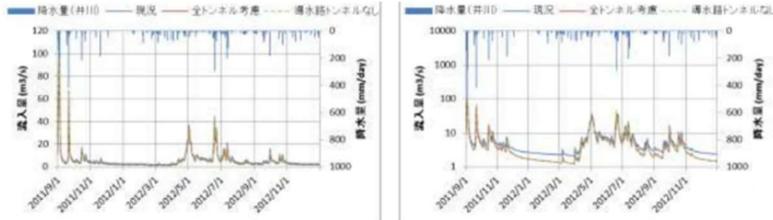


図 15 田代ダム地点における河川流量  
(現況とトンネル掘削後の比較。右側は流量が対数で示されている。)

VI-17

17

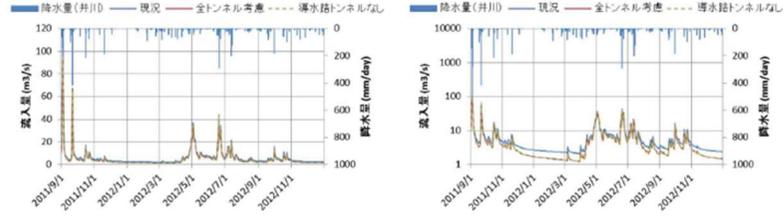


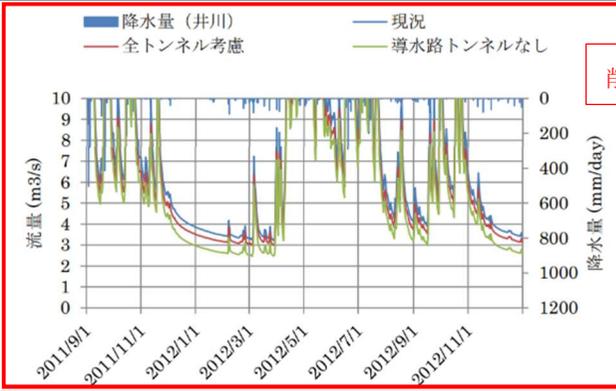
図 15 田代ダム地点における河川流量  
(現況とトンネル掘削後の比較。右側は流量が対数で示されている。)

図 16 に、榎島地点の現況とトンネル掘削後の河川流量について、導水路トンネルの有無を含めて、比較して示す。

河川流量は、東京電力の田代ダムからの取水、中部電力の木賊堰堤、滝見堰堤などからの取水を無視している。流量の少ない時期の榎島の河川流量は、導水路トンネルを設けない場合、現況より約 1~1.5m³/sec 程度減少する。導水路トンネルを設けても、本坑内でのポンプアップを行わない場合は 0.3~0.4m³/sec 程度の流量の減少が生じ、現況を維持することはできない。

VI-17

18



削除

図 16 に、榎島地点の現況とトンネル掘削後の河川流量について、導水路トンネルの有無を含めて、比較して示す。

河川流量は、東京電力の田代ダムからの取水、中部電力の木賊堰堤、滝見堰堤などからの取水を無視している。流量の少ない時期の榎島の河川流量は、導水路トンネルを設けない場合、現況より約 1~1.5m³/sec 程度減少する。導水路トンネルを設けても、本坑内でのポンプアップを行わない場合は 0.3~0.4m³/sec 程度の流量の減少が生じ、現況を維持することはできない。

18

(削除)

以降、ページズレ

20 図 18 の年平均河川流量は、田代ダム地点で約  $1\text{ m}^3/\text{sec}$  (約 19%) 減少する。田代ダムの下流側では減少量が約  $1.4\text{ m}^3/\text{sec}$  (約 23%) とより大きな影響を受けている。これは本川左岸側の畑薙断層沿いに本坑に水が引かれ、支沢からの流入量が大きく減少する結果である。

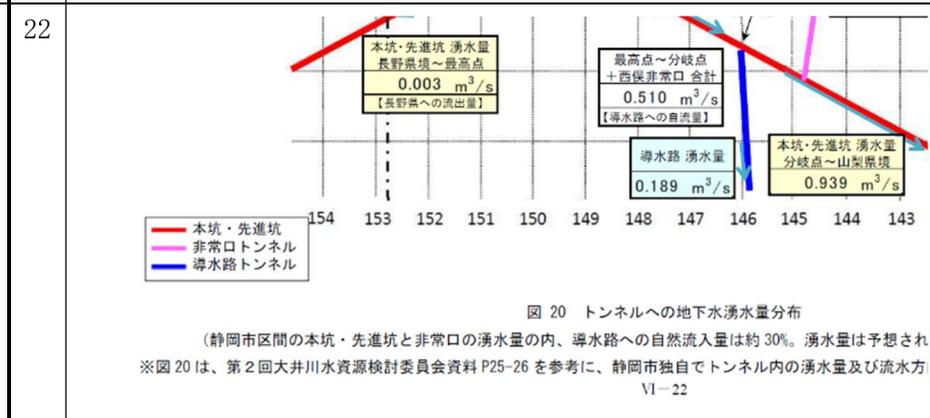
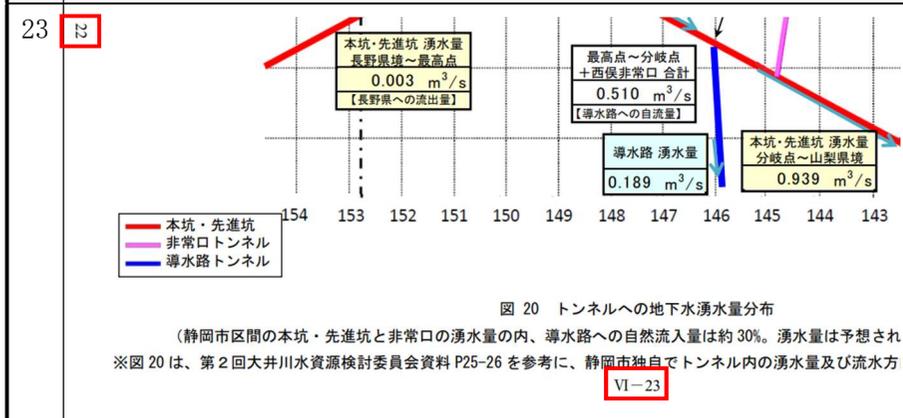
木賊堰堤地点の流量は、導水路トンネルを設けた場合、設けない場合より  $0.2\text{ m}^3/\text{sec}$  程度少なくなる。これは、導水路トンネルを掘削することで、その上の本川右岸側の支沢の流量が減少する結果である。この減少分は導水路トンネル中に湧出して、榎島地点で本川に戻される。

河川流量の少ない時期のある時点 (2012 年 1 月 1 日の気象条件) では、図 19 に示すように、田代ダム地点の流量は枯渇しないものの、約  $1\text{ m}^3/\text{sec}$  (36%) の流量減少が生じることになる。榎島の河川流量の減少は導水路トンネルを設けない場合  $1.25\text{ m}^3/\text{sec}$  (33%) の減少で、導水路トンネルを設けても  $0.34\text{ m}^3/\text{sec}$  (9%) 減少する。

19 図 18 の年平均河川流量は、田代ダム地点で約  $1\text{ m}^3/\text{sec}$  (約 19%) 減少する。田代ダムの下流側では減少量が約  $1.4\text{ m}^3/\text{sec}$  (約 23%) とより大きな影響を受けている。これは本川左岸側の畑薙断層沿いに本坑に水が引かれ、支沢からの流入量が大きく減少する結果である。

木賊堰堤地点の流量は、導水路トンネルを設けた場合、設けない場合より  $0.2\text{ m}^3/\text{sec}$  程度少なくなる。これは、導水路トンネルを掘削することで、その上の本川右岸側の支沢の流量が減少する結果である。この減少分は導水路トンネル中に湧出して、榎島地点で本川に戻される。

河川流量の少ない時期のある時点 (2012 年 1 月 1 日の気象条件) では、図 19 に示すように、田代ダム地点の流量は枯渇しないものの、約  $1\text{ m}^3/\text{sec}$  (36%) の流量減少が生じることになる。榎島の河川流量の減少は導水路トンネルを設けない場合  $0.9\text{ m}^3/\text{sec}$  (23%) の減少で、導水路トンネルを設けても  $0.34\text{ m}^3/\text{sec}$  (9%) 減少する。



29 観測と解析対象期間が異なるため、一概に比較できないが、本坑と導水路トンネル分岐点の上方の悪沢 (西俣右岸) と、導水路トンネルが直下を通過する蛇沢 (本川右岸) の実測流量は、解析が示す流量よりかなり多くなっている。解析期間を 2015 年としても、その違いは解消しないとみられる。これは、沢を縦断方向に通過する、それぞれ「悪沢断層」、「蛇沢断層」について、解析モデルでは透水性 (特に低標高部) を大きく設定 (透水係数  $1 \times 10^{-2}\text{ cm/sec}$ ) した結果である可能性が高い。断層の透水性を小さくして解析することで、両沢の流量は増加し観測結果に近づく事は確認できている。

28 観測と解析対象期間が異なるため、一概に比較できないが、本坑と導水路トンネル分岐点の上方の悪沢 (西俣右岸) と、導水路トンネルが直下を通過する蛇沢 (本川右岸) の実測流量は、解析が示す流量よりかなり多くなっている。解析期間を 2015 年としても、その違いは解消しないとみられる。これは、沢を縦断方向に通過する、それぞれ「悪沢断層」、「蛇沢断層」について、解析モデルでは透水性 (特に低標高部) を大きく設定 (透水係数  $1 \times 10^{-5}\text{ m/sec}$ ) した結果である可能性が高い。断層の透水性を小さくして解析することで、両沢の流量は増加し観測結果に近づく事は確認できている。